

人生の行路

あなたは嫌な問題の少しも起らないところを求めている。無理もない。しかし、静かに私の言うことを聞いてくれ。

人間の生きているところには、どこにでも、必ず問題が起る。好きな問題が起る限り、嫌な問題も必ず起る。もしあなたが、嫌な問題の少しも起らないところを求めるならば、それは人の一人もいない国にゆくより外はない。

嫌な問題が、あまりに多く降りかかって来ると、人間は疲れる。

あなたは今、疲れに疲れて、重い重い足どりで、トボトボとみじめな歩みが続けている。

出来ることなら、側からそつと替わつてやりたいときえ思う。しかし、待て、小さい慈悲を起してはならない。歩きながら一緒に語らう。

見てくれ、私もあなたよりも、もつと重い荷物を持つているのだから。

日は西の山に傾いて来た。おい、泣いているのか。淋しいにちがいない。だが涙では何も解決しない。

おい！荷物を下してしまおうとするのか。

待て！どんなに苦しくても、荷物を下してはならない。

私も荷物を下そうとしたことがある。しかし、その度にだんだん重くなつた。

あれを見よ。前に行く人も、後から来る人も、みな、一荷づつ背負っているではないか。

私だつて苦しみが好きではない。好きでないが故に、私に降りかかつて来た苦しみだけは、私が生じつと、黙つて背負つてゆこうと決定したのだ。

なぜかと言うのか。誰も彼もが、自分の苦悩の原因を他人になすりつけて、騒々しくわめきたてるために、自分の上にも、他人の上にも、二重の嫌な問題が起るではないか。

私が苦しみが好きのように、他人もまた苦しみが好きなのだ。それ故にせめて、私の苦しみをじつと抱きしめて、問題を広げないように心がけているのだ。

あれを見よ。かしこにも一組の人達がいる。見えるだらう。あのグループは大変に暗いらしいが、誰があんなに真暗にしているのか。

あれを見よ、中央に立つて、一番皆を暗くしている男が、一番、善人か、智者かのように、ふんぞり返つて権力をふりまわしているではないか。

あれを見よ。こうまで暗いのは、自分以外の者が悪いからだ、皆を責めつけて、苦しめているのではないか。あのグループは、あの男のために、だんだんと暗くなっている。

皆あの男が悪いのに、悲しいことには、眼が内に開いていない。

眼を転じて左を見よ。一人の特別に光っている老人が歩んでいるだらう。しかも誰よりも重い大きな荷物を背負いつつ、誰よりも軽そうに、若人の如く、歩みきつているだらう。

あの人の背負っている荷物と、あなたの荷物と比較したら、問題にならないほどあなたの荷物は小さいのに、それなのに、あなたは苦しみ、あの老人は明るく楽しそうなのは何故であろうか。

そして見よ。多くの人があの老人の側に集ってゆくが、暗い顔の人たちがみな明るそうになって、老人のような強い足どりで歩みはじめてゆく。

あの老人の過去の足跡を見よ。ずいぶん苦しい道を通っている。それなのに、その苦しみにかけていない。何故だらう。

あの老人は、足元を見つめて歩いているが、あの耳を見よ。何ものかが喚んでいるのを聞いている。無視することの出来ない声を聞いて、その声に生きていようだ。彼は素直に歩んでいる。

何？あの老人の上には、何か生きていと言うのか。そうだ。彼でないものの絶対の力が、彼の上に生きている。そのものの聖なる輝きが、老人の後光のように見えるのだ。あの老人は、世の中を明るくしているのに、自分ではそれを知らないのだ。知らないのみか、あれを聞け、

「俺の内心には、恐しい毒蛇が巣くっている。俺はおそるべき奴だ。」と言っているではないか。

更に眼を転じて見よ。世をすねて、刻々と滅亡の断崖に歩みを続けている者。

ヒステリーをおこして、夫を火焰の中に焼きつつ、それなのに夫を責めている女。

そうかと思えば、あの恐しい火焰の中に包まれつつ、全く髪の毛一本焼かれない尊い相の人。

たくさん世の相が見えるではないか。じつと色々の相について学ぶがよい。あなたの、どこが悪かったのか。それとも他人が悪いのか。

あなたは、あなたを暗くする人のために敗けて来た。また時々、その人を取り除こうとした。またある時は、その周囲を治めようとして、随分の案を立てて、それを強いつけようとした。そしてその最後が今の絶望だ。

どれもこれも、まちがったやり方であった。それがわかるか。

あるところに、古の高僧たちが一生かかって解いたような、尊い文句を何十と集めて、組織立った案をつくり、それを持ちまわって、人や社会を改善しようとして一生を費した人があった。しかし、それは世の中をより悪く騒々しくしたに過ぎなかった。大切なことが一つ失われていたからである。

自分自身にその案を一度も適用しようとしなかったことだ。
あなたもまたそれではなかったか。